

LT班 活動報告書

立命館コンピュータクラブ 2019年度前期プロジェクト活動 2019 年 08 月 08 日

程瑞希 *1 深田紘希 *2 渥美柁彦 *3 堀田隆成 *2 宇佐基史 *4 佐藤祐樹 *6 林紘也 *2
山口流星 *7 立川泰暉 *8 北村優奈 *9 稲垣和真 *10 藤原浩一 *11 伊吹翔 *2

*1 理工学部 機械工学科 三回生

*2 情報理工学部 情報理工学科 一回生

*3 理工学部 電子情報工学科 三回生

*4 情報理工学部 情報理工学科 一回生

*5 理工学部 ロボティクス学科 一回生

*6 理工学部 電子情報工学科 一回生

*7 理工学部 数理科学科 三回生

*8 情報理工学部 セキュリティ・ネットワークコース 二回生

*9 情報理工学部 システムアーキテクトコース 二回生

*10 情報理工学部 知能情報コース 三回生

*11 情報理工学部 セキュリティ・ネットワークコース 三回生

目次

1. はじめに	3
2. 活動概要	3
3. 活動内容	4
3.1 自己紹介スライド	4
3.1.1. 情報量の取捨選択	4
3.1.2. 掴み要素	4
3.2. デザインの4原則	5
3.2.1. 近接	5
3.2.2. 整列	5
3.2.3. 対比	5
3.2.4. 反復	6
3.3. 色	7
3.3.1. 配色の重要性	7
3.3.2. 配色の質の向上	8
3.4. フォント	8
3.5. 画像	8
3.6. テンポ	9
3.6.1. 速い速度	10
3.6.2. 遅い速度	10
4. 活動で得られたもの	10
4.1. 一回生にとって	10
4.2. 上回生にとって	11
5. 展望	11
6. 参考資料	11

1. はじめに

文責：程瑞希

我々情報系の大学生にとって、各種イベントでライトニングトーク(以下、LT)という5分間のプレゼンテーションを行ったり傍聴する機会が多い。特に本サークルでは毎週行われる定例会議でLTを発表する機会があり、部員は1年に原則1度のLT発表を義務付けられている。本プロジェクトでは情報分野において重要な要素であるLTに対して、「どんなに素晴らしいものも伝わらなければ意味がない」を念頭に、プロジェクトリーダーを筆頭として、班員のLTの全体的なクオリティの向上を目指して活動を行った。

2. 活動概要

文責：程瑞希

スケジュールの都合上2グループに別れ、各グループそれぞれ毎週1回活動を行った。初週と最終週を除き、毎週前半にLTに関する知識を教え、後半で班員のスライドの進捗を共有し意見交換を行った。各週の活動内容は以下の通りである。

各週の活動内容

週	活動内容
第一週	LT概論, 5W1H
第二週	自己紹介スライド, テクスチャ
第三週	ショートカットキー
第四週	スケジュール確認
第五週	フォント, フレーム
第六週	LT発表会

3. 活動内容

活動をするにあたり気をつけた点や学んだ点を以下に活動内容として記述する。

3.1 自己紹介スライド

文責：林紘也

プレゼンテーションにおいて冒頭の30秒は、聴衆がそのプレゼンを聴くに値するか判断する時間であり、冒頭の自己紹介で聴衆を引き込めるかどうかプレゼンの重要な要素の1つである。以下私の作ったスライドを元に私の考える自己紹介スライドの要点について述べる。

3.1.1. 情報量の取捨選択

名前、学部、回生などの覚えてほしい重要な情報は簡潔に書く。括弧部分の邪魔、またその逆にならないよう気をつける。趣味や単位の話は発表者のことを知っていなければよほどのことでないと印象に残らない。自己紹介の目的と矛盾するので除く。

3.1.2. 括弧要素

幼稚園での似顔絵コンクールという明らかにどうでもいい、関係ないことを真面目に書くことで、突っ込みどころを作る。また真面目な文章のなかに「すくすく」といった雰囲気にとぐわな言葉で軽い笑いをいれる。これらで聴衆の興味関心を引きつけることを狙った。このように自己紹介スライドでの括弧は疑問点やインパクトを与え、興味関心を引かせるがその後の本題の邪魔をしない程度のものにする。

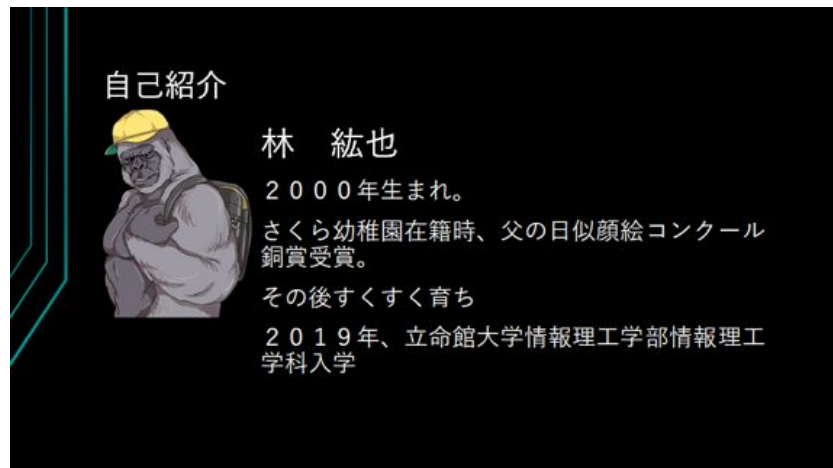


図1 自己紹介シート

3.2. デザインの4原則

文責：深田紘希

デザインには、見やすく内容が伝わりやすいといわれている原則がある。LT班の活動ではそれをスライド作成の基本とした。私が作成したスライドを例に4原則をどう生かしたかについても書き留める。

3.2.1. 近接

「近接」は関連する項目をまとめてグループ化することだ。関連しない情報同士を近づけないことでページの構造と内容の直感的な手がかりを提供する。近接を活用するために余白を利用するとよい。

3.2.2. 整列

「整列」は各要素を意図的に配置することだ。すべての項目は他のものと視覚的に関連していなければならない。

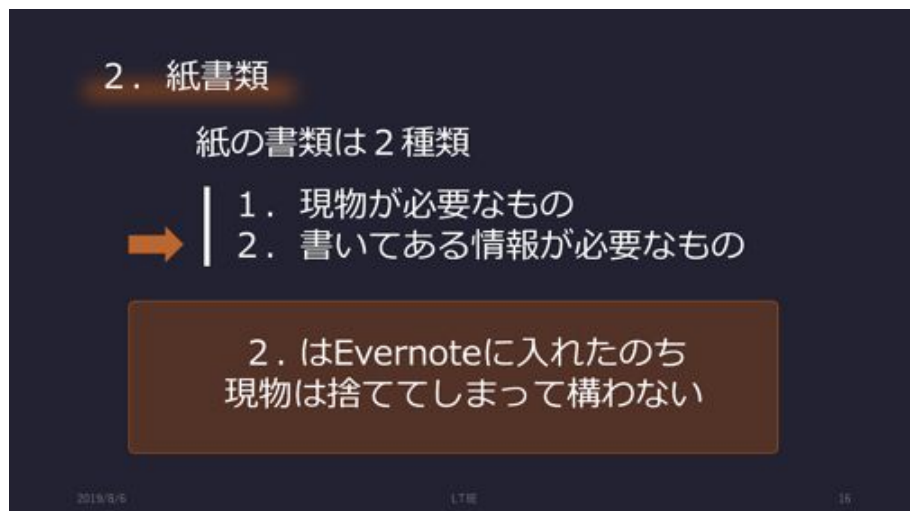


図2 近接と整列の例

3.2.3. 対比

「対比」は異なる要素をはっきりさせることだ。色やフォントにおいて特に重要で、詳しくはのちの「色」、「フォント」で意識するところだ。



図3 対比の例1

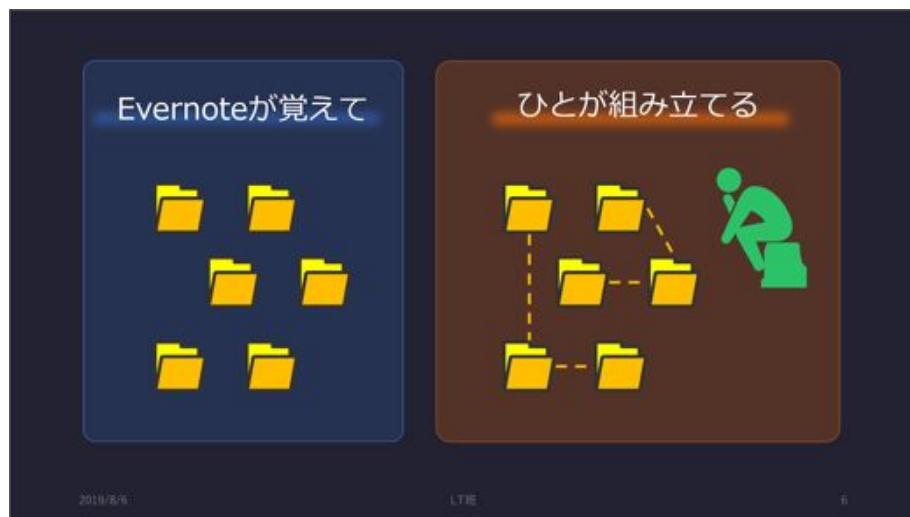


図4 対比の例2

3.2.4. 反復

文責：海原義樹

「反復」はデザイン上何かの特徴について、全体を通して繰り返すことであり、要素を一定のルールで繰り返すことで一貫性を持たせることができる。反復の例としてスライドの背景にテクスチャと呼ばれるものを用いることができる。テクスチャは、背景の画像の一形態で、何らかの意味を成すものではないが、背景に模様を加えることで聴衆の印象を良くする働きがある。これを用いた例を図5、6に示す。また、この他にも、スライドの四隅などに、発表者や内容についてのアイコンや、ページ数などを配置することによって発表のわかりやすさや一貫性を高めることができる。



図5 反復の例1

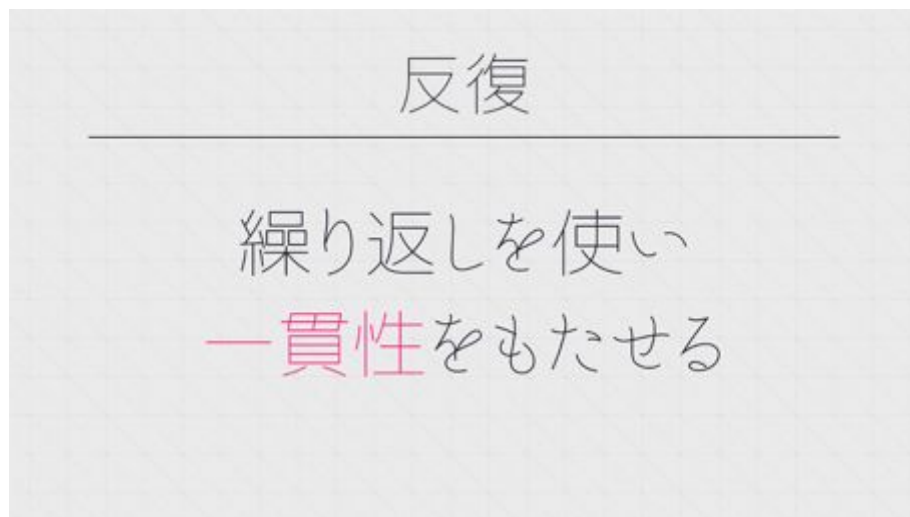


図6 反復の例2

3.3. 色

文責：佐藤祐樹

3.3.1. 配色の重要性

プレゼンテーション、ポスター、その他の創作物は、適切な配色を行うことで目的とする効果を引き出すことが可能である。例えば、視認性、識別性が重要な交通標識では彩度を高くする等のデザインがされている。しかし、プレゼンテーションにおいては前述のような高彩度は不必要であり、むしろ目の疲労等の弊害を引き起こすため、低彩度でのデザインが望ましい。また、プレゼンテーションの場合は、その性質上、プロジェクターが用いられることが多いため、スライドの背景を白にすると眩しくなり、文字の視認性が下がる等の支障が生じる。この問題は背景を暗色等の明度が低い色にすることによって解決できる。

3.3.2. 配色の質の向上

上記の通り、目的に応じた色をその都度選択することの重要性は明らかであるが、毎回状況に合わせて色を作成するのはあまりにも面倒である。しかし、一般にプレゼンテーションに適した色というのは存在する。そこでPowerPointのカラーパレットという機能を使う。これは指定した色を保存しておくことができるというものである。「PowerPoint color palette」などと検索するとプレゼンテーションに適した色を集めたカラーパレットを見つけることができる。これを登録することにより、容易にプレゼンテーションの配色の質を向上させることができる。

3.4. フォント

文責：堀田流星

スライド上で使用するフォントを変えることで与える印象を変えるのは当然のことである。（例えば明朝体がフォーマルな場で使用されることが多い一方、ゴシック体がカジュアルな印象を与えるのは言うまでもない。）そのため実際の使用を踏まえた感想をここでは述べる。私がLT班で作成したスライドで主に使用したフォントは「游ゴシック」^{*1}、「なつめもじ」^{*1}、「あんずもじ」^{*2}である。

游ゴシックは最近のOSでは標準で使用するのことができるフォントで、無料で使えるフォントの中では大変美しく、使いやすいフォントである。「なつめもじ」「あんずもじ」は無料で配布されているフォントの一つで手書きに近いやわらかな印象を与えるフォントだ。私は最終的にスライドのほとんどにこのフォントを使用した。他にも班員の使っていたフォントを紹介しようと思う。「JKゴシック」や「けいふおんと!」「ようじょふおんと」等である。以上のフォントをこのプロジェクト活動を通して知り、活用することで私のスライド並びに班員のスライドは洗練された印象を持ち、よりエレガントな表現が可能となった。

3.5. 画像

文責：立川泰暉

プレゼンテーションのスライドにターミナルやエディタなどのコードを画像として載せる場合、それらに設定されている色やコードの長さによっては図7のように見辛いことがある。そこで図8のように注目して欲しい部分を色のついた枠などで強調することでスライドを見やすくすることができた。また、図7のように画像の外に補足情報を書くよりも図8のように画像をスライドの1枚で表示する方が有用な時もあることが分かった。理由としては、画像の情報から分かることは補足情報として書いておく必要がなく、画像を1枚で表示した方が見易いからである。

```
>>> var number : Int = 0
>>> number = null
error: null can not be a value of a non-null type Int
number = null
      ^
>>> █
```

変数にnullを設定できない

11

図7

```
>>> var number : Int = 0
>>> number = null
error: null can not be a value of a non-null type Int
number = null
      ^
>>> █
```

図8

3.6. テンポ

文責：稲垣和真

スライドの発表において、テンポは重要なファクターである。ただ淡々と話しているだけでは、単調な発表となり聴衆にインパクトを与えることができない。聴衆にインパクトを与えつつ、かつ伝えたいことをわかりやすくするようなテンポについての考察をこの章で記載する。

3.6.1. 速い速度

あまり重要ではない内容や、概要の説明などはざっくり話していいだろう。本質的でない部分を遅く話しているのは、無駄に発表時間を消費してしまい、また聴衆の集中力を切らしてしまう原因を作ってしまう。また、受けを狙うときもテンポよく、比較的早めに紙芝居のようなスピードで話しても効果があるだろう。

3.6.2. 遅い速度

重大な箇所や聴衆にとって難易度が高いと予想される箇所は、ゆっくり丁寧に話すべきだろう。重大な要素を解説するときに、ペラペラと突き進んでしまつては聴衆が話についてこれなくなってしまうだろう。

4. 活動で得られたもの

4.1. 一回生にとって

文責：深田紘希

大学において授業や外部イベント等で必要とされるLTを、デザインの視点から取り組むことができて勉強になった。デザインに明確な正解はないが、なぜそれは整然として見えるのか、といった釈然としない部分を言語化していることが多い。初めてプレゼン発表をする上で、自分では気づきにくいミスを、事前に回避する助けとなった。

LTはまず一度経験し、そこでミスや成功をすることで洗練されていくものだ。LT班はこの初めてのLTへのハードルを大きく下げてくれた。すると後期のLT義務は初めてのLTではなくなるので、非常に参加しやすくなる。LT班の活動は、今の会内のLT延滞が多い状況を後期セメスターで解消する一助になると考えられる。

LT班のレビュータイムは、ほかの参加者からの指摘が的確でより良いスライドを作成する助けとなった。また他の1回生のプレゼン発表を間近で見ることで、悪い点は反面教師にでき、良いところは取り込んでいくことができた。

4.2. 上回生にとって

文責：山口流星

本活動を通して、デザインの原則や発表のためのノウハウを再認識する良い機会となった。毎週各人が制作した発表スライドについて全員で意見交換する時間が設けられてた。そのため、さまざまな表現方法を知ることが出来、また、当人も参加者から意見を得られたため、より洗練されたスライドが制作できるようになった。

5. 展望

文責：山口流星

本活動を通して、LTないし発表の基本を身に付けることが出来た。今後の展望として、以降の発表の機会にて本活動で得た知識を存分に発揮し、さらなる発表技術に磨きをかけていきたい。また、スライドの表現について深く研究したり、他人の発表を多角的に分析することで、より伝えやすい発表を行えるよう精進していきたい。

6. 参考資料

*1 http://www8.plala.or.jp/p_dolce/index.html

*2 同上

筒井美希, エムディエヌコーポレーション(MdN), "なるほどデザイン"
<https://unsplash.com/>

<https://www.transparenttextures.com/>
<https://sozaikoujou.com/30695>